

# 史跡山形城跡 二ノ丸土塁隅櫓石垣復原完成一般公開 資料

平成27年3月21日（土） 山形市教育委員会社会教育青少年課

## 調査要項

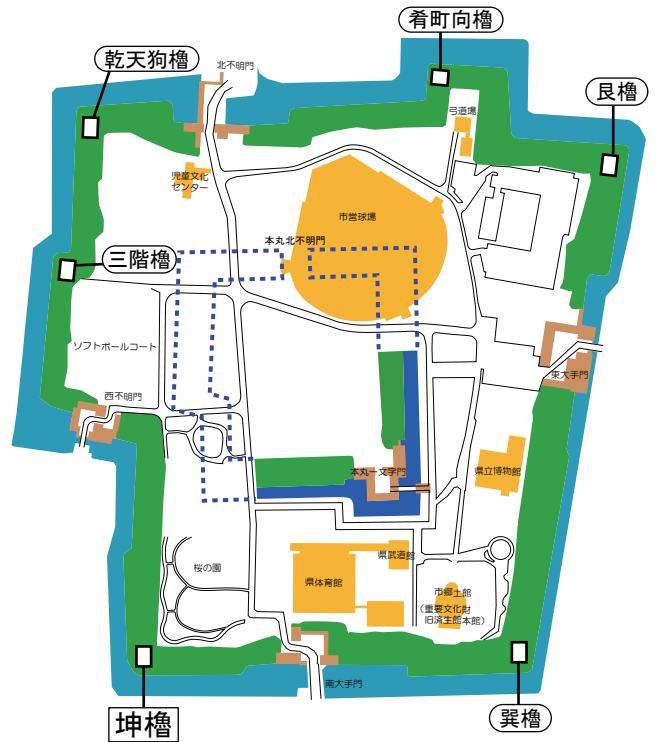
遺跡名	国指定史跡 山形城跡
所在地	山形市霞城町（霞城公園）
遺跡番号	1番（山形県遺跡地図）
調査期間	平成24年6月1日～9月28日 平成25年5月23日～9月30日 平成26年5月27日～9月29日
調査面積	約200㎡
調査原因	史跡山形城跡（霞城公園）二ノ丸土塁園路整備事業
遺跡種別	城郭（近世城郭）
時代	近世・近現代
遺構	石垣、土塀礎石石列など
遺物	瓦類、陶磁器など
調査事業の主体	山形市公園緑地課
調査実施の機関	山形市教育委員会
調査担当	山形市教育委員会社会教育青少年課

## 1 概要

山形城跡は、最上義光が拡張整備したといわれる本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる平城です。現在、二ノ丸から内側は霞城公園として憩いの場となっていますが、昭和61年国史跡指定を受けて以来整備が進められ、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣などが復原され新たなシンボルとなっています。

今回は、二ノ丸土塁（南西部）の園路を歩きやすいよう整備する事業に先立ち、発掘調査を行いました。その結果、土中に埋められていた南西隅櫓の坤櫓の石垣が検出されました。調査は3ヵ年実施し、石垣の規模・使用されている石材の種類・出土する瓦の分類などを精査しました。

坤櫓石垣の復原にあたっては、調査の成果と江戸時代の絵図の情報に基づき当時の姿を意識して行いました。



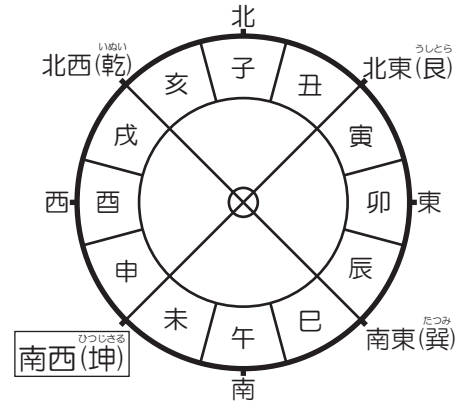
## 歴代藩主年表

明治二年	弘化二年	明和四年	明和元年	延享三年	元禄十三年	元禄五年	貞享三年	貞享二年	寛文八年	慶安元年	正保元年	寛永二十年	寛永十三年	元和八年	慶長五年	延文元年	和暦											
一八六九	一八四五	一七六七	一七六四	一七四六	一七〇〇	一六九二	一六八六	一六八五	一六六八	一六四八	一六四四	一六四三	一六三六	一六二二	一六〇〇	一三五六	西暦											
水野忠弘	水野忠精	秋元志朝	秋元久朝	秋元永朝	秋元涼朝	幕府領	(大給) 松平乗佑	堀田正亮	堀田正春	堀田正虎	(奥平) 松平忠雅	(奥平) 松平忠弘	(結城) 松平直矩	堀田正仲	奥平昌章	奥平昌能	(奥平) 松平忠弘	(結城) 松平直基	幕府領	保科正之	鳥居忠恒	鳥居忠政	最上家信(義俊)	最上家親	最上義光	斯波兼頼	藩主	
五万石			六万石				六万石	一〇万石	一〇万石	一〇万石	九万石	十五万石	十五万石	二十万石	二十万石	二十二万石	五十七万石											石高

## 2 坤櫓（ひつじさるやぐら）

### (1) 名称の由来

坤櫓は、二ノ丸土塁の南西角に位置する隅櫓のひとつです。江戸時代の方角は干支で表現していましたが、南西は坤（ひつじさる）ですので、櫓もこの名称で呼ばれました。二ノ丸土塁にはこの他、巽櫓（たつみやぐら）、艮櫓（うしとらやぐら）、乾天狗櫓（いぬいてんぐやぐら）の隅櫓のほか、西側に三階櫓、北側に肴町向櫓（さかなまちむかいやぐら）がありました。

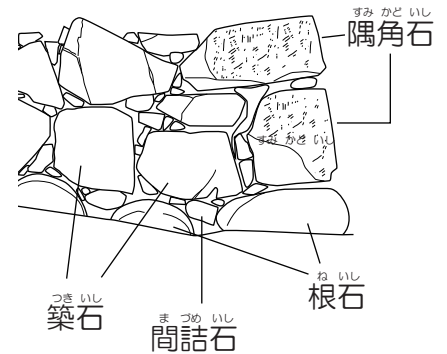


### (2) 積み方の特徴

最下段（1段目）の根石（ねいし）には、加工されていない玉石を設置しています。根石は、築造当初から土に埋まっている状態でした。

2段目以上の築石は割石を用いており、石材の前面（まえづら・正面のこと）は石垣の平面性を特に意識したようで、割って平らになった部分を選んでいきます。また、ある程度石材の横目地が通るように配置していますが、高低差のある場所で石垣を築造しているため、横目地が通らない部分もあります。石材と石材の間に空間が生じる場合は、間詰石（まづめいし）と呼ばれる小石を充填しています。

四隅の石材は他の石材より大きく直方体傾向に成形された割石を交互に積み上げる算木積み（さんぎづみ）という技法で積まれており、より強度を高めています。また、この隅角石の前面はノミなどで表面を平滑に成形しています。このような技法は、隅角石のみ見られ、築石ではほとんど確認されませんでした。



拡大

算木積み

### (3) 石材の種類

石垣に使用された個々の石材の調査は、山形大学の友幸子教授に依頼し、表1のような結果を得ております。この中で、①安山岩は根石で用いられ、ほとんどが未加工の玉石です。②花崗岩（かこうがん）、③デイサイト、④流紋岩（りゅうもんがん）は2段目以上の割石で用いられています。これら②～④の3種の岩石は割れやすく加工しやすいので、割石に使用されたと考えられます。

②③④の石材はある程度産地が判別できました。②は馬見ヶ崎川に滑川が合流する市立東沢小学校の東側の丘陵、③は市民プールジャバの北側、④は千歳山山麓です。

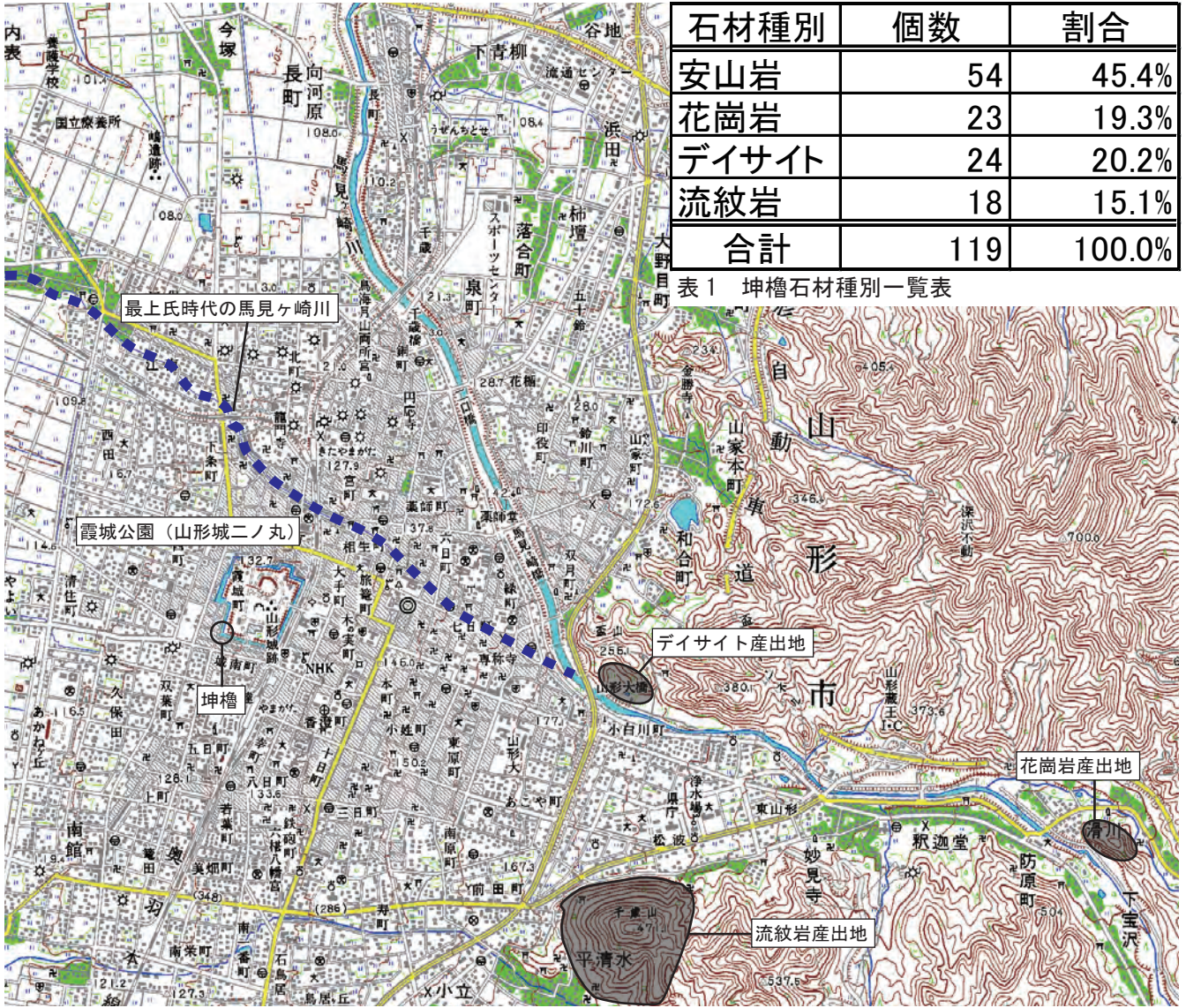
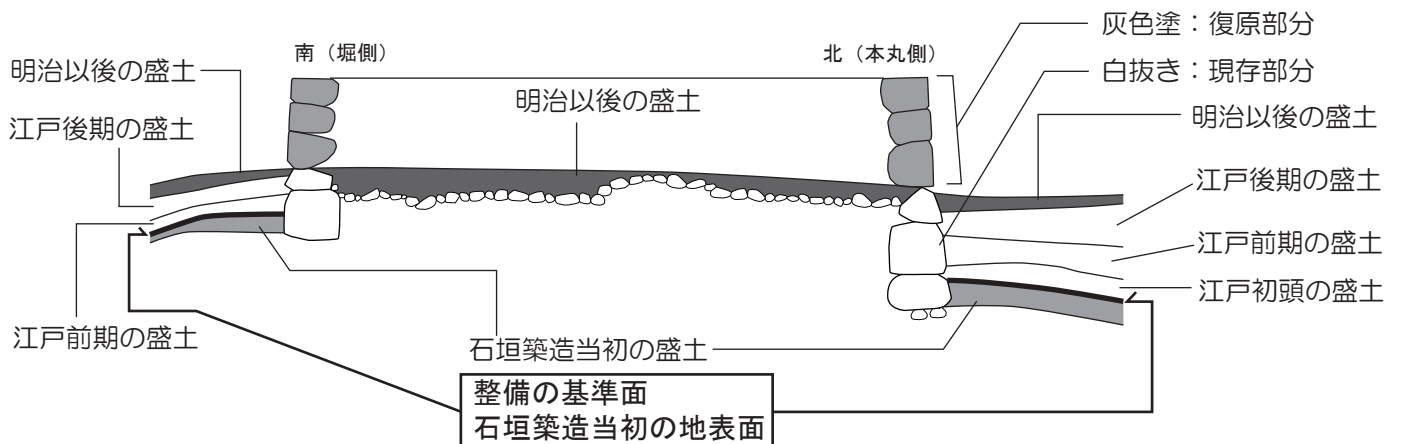


図1 坤櫓石材産地位置図（5万分の1）

### (3) 復原の方法

復原のための発掘調査は、当時の地表面がどこか判断することから始めました。調査では、石垣の周辺には厚い場所で1m以上の土が堆積していました。これは、江戸時代を通じての櫓の補修と関係があります。櫓は少なくとも3回は建替え、もしくは瓦の葺き替えが行われたようです。そのたびに古い瓦を周辺に廃棄し、そこに土を盛って整地することが繰り返されました。その結果、厚く土が堆積していたのです。

堆積状況の観察から、おおよそ下図のように土層は5時代に分けることができます。復原にあたっては、石垣がなるべく露出し見学できるように、石垣構築当初の地表面を基準に実施することにしました。



### 3. 城門石垣との比較

二ノ丸の東西南北4ヶ所の城門には石垣が現存しています。これらの石垣と、坤櫓石垣（隅櫓石垣）を比較すると以下のような違いがあります。

	城門石垣	／	坤櫓石垣（隅櫓石垣）
①高さ	10尺以上（堀から立上がる）	／	2尺前後（土墨にのっている）
②隅角石	算木積みが完成している	／	算木積み傾向を示すが規格化されていない
③築石	布目崩し積みもしくは乱積み	／	布目崩し積み
④加工技法	矢という道具を用いて割る	／	矢は用いず <small>けんのう</small> 玄翁（金槌の一種）で割られる
⑤表面調整	隅角石、築石ともにノミ調整が入る	／	隅角石にのみ入る
⑥その他	城門石垣にのみ、隅角石の稜線を際立たせる精緻な加工が入る。江戸切りとも呼ばれる。		

このように、主に加工度を比較すると、坤櫓石垣より城門石垣の方が高いと言えます。一般的に時代が下るほど石垣築造技術が向上し加工度が高くなるので、城門石垣のほうが、坤櫓石垣より新しい技術を用いて構築されていることとなります。

### 4. 石垣築造年代

城郭の縄張り（城郭の形状、主に平面形態のこと）は、元和8年（1622）に入部した鳥居氏の時代に形成され、その後現在に至るまで大きな変化はありませんでした。そのため、現存する城門石垣や城門石垣は、鳥居氏以降に築造されたと考えるのが妥当です。

一方、石垣の構築技術は、櫓門石垣より城門石垣の方が新しい技術を使用しています。この差を時代背景に沿って考えると以下の指摘ができます。

- ①古い技術の坤櫓石垣は、鳥居氏時代の築造として矛盾はない。
- ②新しい技術の城門石垣を、保科氏以後の構築とも考えられるが、文献で保科氏以後の大名が石垣を構築あるいは大規模に修復した記録はない。
- ③鳥居氏が入部した際、山形城の破損箇所が多いので幕府公費で修築し、その奉行として城郭修築奉行経験のあるいけだ まさなが池田政長・はなぶさ よしつぐ花房幸次という旗本が派遣された。彼らが携わった箇所のみが、鳥居氏築造部より新しい技術で石垣を構築した。

石垣築造年代が上記のいずれに該当するか、詳細は不明です。厳密に、山形城の石垣の構築年代を探るのはこれからの課題となります。



二ノ丸西門石垣